

犬の非脾臓型血管肉腫における特徴的な CT 画像所見

○ 福田祥子¹⁾、小野晋²⁾、小林哲也³⁾、深澤依里³⁾、小嶋富貴子³⁾、中野優子³⁾、金久保佳代³⁾、山上哲史¹⁾
賀川由美子⁴⁾、岩吉勇¹⁾、白石陽造¹⁾

1) 日本小動物医療センター 2) SkyVets 3) 日本小動物医療センター附属 日本小動物がんセンター 4) NORTH Labo

目的

単純および造影 CT 検査における犬の非脾臓型血管肉腫の画像所見を特徴づけること

方法と材料

2006～2011 年に日本小動物医療センター附属日本小動物がんセンターに来院し、病理組織学的検査で血管肉腫と診断された犬 7 例を対象とし、CT 画像を解析した。腫瘍の発生部位は筋肉内 3 例、肝臓 2 例、皮下 1 例、骨盤腔内 1 例であった。撮影条件は管電流 120kvp、管電圧 100mA、スライス厚 1mm とした。造影手技としてイオパミドール 600mgI/kg を橈側皮静脈から 2ml/sec で投与し、全症例で約 1 分後に撮影した。うち 4 例では約 3 分後にも再撮影した。得られた画像に対し腫瘍の数、内部の均一性、CT 値および造影パターンについて解析した。

結果

腫瘍は 3 例で単発性、4 例で多発性であった。腫瘍内部は単純撮影で 4 例が不均一に、3 例で均一に観察され、造影後は全症例で造影増強効果が不均一に観察された。単純撮影後の腫瘍内部の CT 値は、腫瘍周囲の正常組織と比較して 5 例で低吸収、2 例で等吸収であった。多時相造影 CT 検査では、1. 造影増強効果がほとんど認められなかったパターン、2. 辺縁がリング状に濃染したパターン、3. 濃染した斑状パターンの 3 つに分類された。また、3 分後に再撮影した 4 例では、全例で濃染部位が遠心性に広がる所見が得られた。

考察

犬の非脾臓型の血管肉腫では、単純および造影 CT 検査で特徴的な所見を呈しており、これらの特徴は人の肝血管系腫瘍の CT 所見に類似する可能性がある。